王妃の資格

行見　八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王妃の資格

【Ｎコード】
Ｎ１８１１Ｕ

【作者名】
行見　八雲

【あらすじ】
ある日、突然異世界に来てしまった主人公（女）が、たまたま王様に拾われ、お城で仕事をしながら生活することになった。そんな中、いきなり王妃になってほしいと言われ、王に考え直すように言いに行くところから始まるお話です。
以前投稿した短編『王妃の資格』『王妃の自己防衛力』をまとめたものです。

□登場人物紹介

□登場人物：主人公と出会った順で並べています。
本編で書けるか分からないので、ネタバレも多分に含みます。

●水瀬咲良（みなせさくら）
黒目黒髪の主人公。ある日突然この世界へやって来たのだが、この世界に現れた時の状況から、ごくまれに神世から渡って来る稀人と勘違いされた。
そのため、王に保護され、城で暮らすことになった。異世界から来たため、魔力を有しない。
来た当初は言葉も通じず、随分と苦労したが、王に惚れられたり、最強の仲間を得たりと、今ではある意味で世界最強の存在。

●王
大国アセスフィアの王。群青色の髪に、氷のような薄い青い瞳の、美丈夫。
歴代で至高と言われる魔力と頭脳、カリスマ性を有し、貴族達に対しても絶対的な権限を持つ。弱みもしっかり握り、何でも思い通りにする腹黒。
以前は国内のことにあまり興味を持たず、他人に無関心で冷酷な王だった。
咲良に心底惚れており、咲良に王妃になってほしいが、絶対自分のものにする（自分以外を排除する）自信があるので、気長に口説いている。

●クァルテ・モダーナ
咲良の親友。この世界に来て、言葉も分からなかった咲良の護衛を任されていた。
心は女性な、金髪碧眼で、筋骨隆々の美男子。普段は面倒見の良い、おっとりした性格。
自分の身長と同じくらいの長さの剣を持ち、剣の腕では世界で敵う者はいないと言われている猛者。

●クロラムフェニルヴァイト
齢千年を超える黒竜。人体の時は、黒髪金目の長身で、大人の色気を感じさせる精悍な顔立ち。咲良を孫可愛がりしている。
女ったらしでよく女性を口説いているが、割り切った付き合いしかしない。
竜体になれば２００メートルを超える大きさで、膨大な量の知識と、一国を軽く滅ぼせるほどの、圧倒的な力を有する。

●モクレン
咲良と契約をしている精霊。普段は咲良の影に住んでいる。白い髪にオレンジ色の目で、執事のような恰好をしている。
影を渡り歩く力を持ち、智謀知略・諜報・暗殺・商売・日常的なお世話まで、何でもこなす万能に近い能力を持つ。
そのため、契約者を欲に溺れさせ、破滅に導くことから“禁忌の精霊”と恐れられ、長年契約者がいなかった。

●サフィール・メティス・サルベリアテ・ヴラディスクアンモール
非常に希少な純血の吸血鬼。黒い髪に赤い眼の、ひょろりとした

色白の美青年。
しかし、血が苦手で、菜食主義。涙もろくよく泣く。咲良が血を流すと、切れて人格が変わる。
吸血鬼としての能力は完璧に使いこなせるため、犬や蝙蝠、霧に変身しての諜報活動が得意。催眠術で相手を操ることもできる。

●ユーレナ・リグ・レィーダ
めったに人前に姿を現さないため、物語の中だけの存在と言われているエルフと、人間との間に生まれた、白銀の髪に新緑色の瞳の美少女。しかし、普段は男の子の格好をしている。
古のエルフ王の血を引き、エルフ特有の能力で精霊と会話ができる。またエルフの優れた超感覚で、人の嘘や不審な行動を見抜く力を持つ。
咲良に助けられて以来、咲良を姉のように慕っているが、モクレンとは仲が悪い。

●チック・シシズ
水色の髪に濃い緑色の瞳の少年。タックの双子の兄。
タックと二人で魔法を使う場合には、驚異的な魔力で、どんな魔法も使いこなせるが、単独では魔法は使えない。
そのため、働く場所が無く困っていたところを、タックと共に咲良に拾われた。

●タック・シシズ
水色の髪に濃い青色の瞳の少年。チックの双子の弟。

□登場人物紹介（後書き）

・王妃の資格（前書き）

以前投稿した短編と、少しだけ変わった所があります。

・王妃の資格

これは地球とは異なる世界のお話。

蒼天の空に可愛らしい小鳥が羽ばたく、ある日のこと。

ここ、世界で一番大きな大陸のほとんどを占める大国、アセスフィアの王城の王の執務室では、長い黒髪を後頭部で纏め、シンプルなドレスに身を包んだ女性が、群青色の髪の美丈夫に詰め寄っていた。

「ちょっと、陛下！　私を王妃にするって、本気ですか！！？」

今にも美丈夫――この大国の現王である――の胸ぐらを掴みそうな勢いで、女性は眉を吊り上げて声を張り上げた。

「ああ、本気だ」

そんな女性の勢いを気にもせず、王は手に持っていた書類を執務机に置いて、女性へと向き直った。

その相手の余裕に満ちた態度と、見上げるほどの長身に女性はむっと眉間に皺を寄せる。

「無理無理無理無理無理です！！　私なんか王妃にしたら大変なことになりますって！」

両の拳を握りしめて、全身で否定する女性に、王は苦笑いを浮かべて。

「前にも言っただろう。俺が惚れているのはお前だけだ。お前以外、王妃にするつもりはない」

「いやいや！　それだって、陛下に対して初めて会った時から気安かったとか、言動が突飛で見ていて飽きないとか、そんな理由ですよね！？

でもそれって、私が異世界人だからですって！　異世界、特に私のいた国には、王様なんていなかったから、対応の仕方が分からなかったからですし！

突拍子の無い行動だって、この国との価値観の違いからですよ！

この国での普通が普通じゃないからですよ！

どうせそのうち目も覚めますから、もっと落ち着いて考えて下さい！！」

勢いのまま、女性はそう言い切った。

そう、この女性、水瀬咲良（みなせさくら）は、ある日突然異世界からこの世界にやってきて、たまたまこの国の王に拾われ、王城で仕事をしながら生活することになったのだ。

そんな彼女がこの世界にやってきて、かれこれ二年は経とうとしていた。

だいぶこの世界に慣れたかな～と、思っていた矢先の王の告白に、咲良は心臓が飛び出るほど驚いた。しばらく心臓が拍動のしすぎで痛かった。

そして、先ほど城の者にお祝いの言葉を言われ、王の言っていたことが本気だったと知り、しかも国中にすでに話が広がっていることも知り、慌ててこの執務室に駆け込んできたのだ。

（みんなに冷やかされて、顔から火が出るかと思ったわよっ！！）

「第一、私はまだこの世界のことを良く知らないんですよ！？　そんな女を王妃にしたら、常識が無いだとか、マナーがなってないとかで、国の品位が疑われることにもなりかねません！　だいたい――」

咲良が言葉を続けようとしたとき、コンコンコンと勢いよくノックの音が聞こえ、執務室の扉が開かれた。

「失礼致します。咲良様、例の上下水道整備の報告書が届いております」

そう言って、文官服の男が咲良に、手に持っていた書類の束を渡す。

それを受け取った咲良は、ぱらぱらとページを捲り、ざっと目を通していく。

「いや、その様付止めて。――うん、工事は順調のようね」

そう頷いていた咲良だったが、あるところでぴたりと目線が止まる。

「ん？　この金額おかしいわね。これにはこんなに費用がかかるはずがないのに……。担当は、あの欲深貴族のおっさんか。

費用の着服の可能性があるわ。以前調べさせた時も、疑わしい事例が大量に出てきてたし。

私の権限の使用を許可するから、あのおっさんの屋敷、隅々まで

家宅捜索してきてちょうだい」

「はっ！」

咲良がそう言って、書類を文官の男に返すと、男は頷き礼をして早足に執務室を出て行った。

文官の男が出て行った後、咲良は再び王へと向き直り、

「えと、それで、何でしたっけ？

あ、そうそう、大体、私のような身分の無い、どこの馬の骨とも分からない女を王妃にするなんて、他の貴族達の反対に――――」

「この間、ベルグラード公爵家の養女になっただろう」

「……そうでしたね……」

二月ほど前、何となく公爵家一家に気に入られた咲良は、あれよあれよという間に、養女にされていたのだった。

王の切り返しに、咲良はぐっと言葉に詰まった。

「あ、でもでも、私は王妃の教育も受けてませんし、国内の情勢のことだって――――」

コンコンコン！

再び軽快なノックの音が聞こえ、先ほどとは違う文官服の男が「失礼します」と声をかけ、扉を開けて入ってきた。

「咲良様、こちらは、先だって考案されました調味料の、市場での評価や流通状況の報告書です」

そう言って、手に持っていた書類の束を咲良へ差し出す。

「だから、その様付止めてって。うん、市場への広がりはまずまずね。今度は、あれを使った料理を考えて、国内に広げてみよう。

あれが世界中で取引されるようになれば、国にとって良い収入源になるし、この国ならではの料理が流行れば、国外からの観光客もお金を落としてくれるしね。ふふふ、金の余ってる珍しいもの好きの貴族達が、好みそうな料理を考えないと。

そう言えば、国の南東部のシュクト地方を、遺跡や温泉を売りにした保養地にするのもいいわね。ああ、ちゃんと自然破壊はしないから安心してね。

うん、近々視察に行くわよ。人選は任せるわ。調整をお願い」

咲良が文官の男を見ながらそう言えば、男も表情を引き締めて頷いた。

「はい！　お任せください！」

そのまま礼をして退出する男を見送って、咲良はまた王の方へ体を向け。

「え～～～っと、だから、私には王妃に相応しいような気品も、カリスマ性も、威厳もな――――」

コンコンコン！！

焦ったようなノックの音が響き、執務室の扉が開かれた。

「失礼します！　咲良様！」

またしても、先の2人とは違う文官服の男が、早足で咲良へと近づき、急ぎの用らしく何事かを耳打ちする。

「だ～か～ら～、その様付止めてって……」

男の報告を聞いていた咲良の眉間に、ぐっと皺が寄った。

「あのハゲ子爵が！　議会で決まった法律に従わないばかりか、そんなことまで！」

忌々しそうに呟いた咲良は、王に退出の挨拶をしてから、早足で扉へと向かっていく。

「私が制圧に向かうわ！　クァルテ達を呼んでちょうだい！」

「はっ！　直ちに！」

文官を付き従えていくその凛とした背中が、扉の向こうへ消えていくのを見ながら、王は愛おしそうに目を細めて微笑んだ。

「お前以外に、誰が王妃に相応しいというのだ」

・王妃の自己防衛力

これは、地球とは異なる世界のお話。

うららかな日差しの中、可愛らしい蝶がふわふわと舞う、ある日のこと。

ここ、大国、アセスフィアの王城の王の執務室では、いつも通り長い黒髪を後頭部で纏め、シンプルなドレスに身を包んだ咲良が、群青色の髪の王に詰め寄っていた。

「陛下！　今日こそ、私を王妃にするという考えを、改めて頂きます！」

咲良が両手を執務机の上に置き、そう王に詰め寄ると、王は、手にしていた書類を執務机に置いて、椅子に腰かけたまま、咲良を見上げた。

「だから、俺が王妃にしたいのはお前だけだと言っているだろう。誰が何を言おうが、改めるつもりはないぞ。大体、誰もがお前が王妃に相応しいと認めているのだから、問題は無かろう」

言っても聞かない子を宥めているかのような、少し困ったような顔で王に笑われて、咲良はむっと唇を噛んだ。

「それは、陛下が認めさせるために、あれやこれやをしたからでしょう！　この間まで反対していた貴族のおやじ共が、いきなりにこにこと祝いの言葉を言ってきて、そりゃーもう気持ち悪かったんで

すから！
　じゃなくて！　私のような魔力も持たない者が、王妃になるなど、と、反対する者もまだまだ多く――――」

　そう、この世界では、誰もが魔力を有し、大なり小なり魔法を使っているのだが、異世界から来た咲良には、当然というか、魔力が無かったのだ。
　そんな咲良が王妃になれば、いろいろ問題が出てくるだろうと、咲良は王を説得に来たのだが。

「さくらちゃーん！！」

　その時、ばーんと盛大な音を立てて、執務室のドアが開かれた。
　ドアの前に立っていたのは、背が高く筋骨隆々の、金髪碧眼の精悍な顔立ちの青年だった。

「ちょっと、さくらちゃん！　陛下と結婚するんですって？　いや～～ん！　素敵ねぇ！
　ねね、お願い！　ドレス選びにはあたしも混ぜてね。さくらちゃんに似合う可愛いドレス、選んじゃうんだから！」

　体をくねらせ、顔の横で組んだ両手を左右に振りながら、満面の笑顔で青年は咲良に言った。

　この男性は咲良の直属の部下の一人で、名を、クァルテ・モダーナという。
　普段は、逞しい体に女言葉という、少し変わった人物だが、一度戦場に立てば、その身の丈と同じ長さの大剣を振り回し、多くの敵兵を血の海へ沈めてきた猛者である。

彼が剣を一閃すれば、数十の兵がなぎ倒され、剣術でいうならば、世界に並ぶ者はいないと言われるほどの使い手だ。
戦場で“大剣のクァルテ”の名が出れば、敵兵がこぞって逃げ出すほど、他国では恐れられている人物である。

「いや、クァルテ。私まだ結婚しないから」

咲良がクァルテを部屋から出そうと、背中をぐいぐい押しながら、ため息混じりにそう言えば、

「ええ～～～！　そんなこと言ったって、どうせ時間の問題でしょう？　さくらちゃんだって、本当は……」

「わー！　わー！　わー！　わー！　わーー！！」

咲良は大声でクァルテの言葉を遮り、彼を扉の外へと押し出した。

「んもう！　でも、結婚するときには、絶対あたしにドレス選びをさせてよね！」

だいぶ低い位置にある咲良を見下ろしながら、クァルテはバチンとウィンクをして、鼻歌混じりに去って行った。

そんなクァルテの背中を見送りながら、咲良は執務室の扉を閉め、王の方へと向き直った。

「ええっと、どこまで話しましたっけ？
ああ、もう、とにかく、私のような力の無い者が王妃になったら、

さっさと暗殺されちゃって、国内に混乱が――――」

「おう、さくら！」

ノックも無しに執務室の扉が勢いよく開かれ、そこから、先ほどのクァルテよりも長身で、がっちりとした体つきの、黒髪金目の男が室内へずかずかと入ってきた。

「おめぇ、この坊ちゃんと結婚すんだってな。しっかし、大丈夫か？　お前のそのほっそい腰で、この坊ちゃんの××××を××××して、××××××できんのかよ？」

にやにやと笑いながら放送禁止用語を連発する男に、咲良は顔を真っ赤にして、

「こんのセクハラオヤジがあぁぁぁぁ！！　出てけえぇぇぇぇ！！」

男の尻に蹴りを食らわした。

この無精ひげを生やし、胸もとのだらしなく開いた軍服を着た、三十代後半に見える男――――名を、クロラムフェニルヴァイトという――――は、実は、齢千年を超す、もはや伝説上でしか存在しないと言われた、黒竜が人の姿をとったものである。

絶対的な力と、豊富な知識を持ち、本来の竜体に戻れば、その身の丈は二百メートルにも及ぶ。そして、その姿で一つ羽ばたけば、周囲の村が一瞬で壊滅し、その口から吐き出される火炎の球は、一発で一つの都市を滅ぼし、後にはクレーターしか残らない、と言われるほどの威力を持つ。

太古には黒竜の一族が世界の半分を破壊して回った、という伝説もあり、今でも人々から恐れられる存在である。

「お〜〜いてぇ」

と、ちっとも痛く無さそうに笑いながら、男は尻をさすりながら部屋を出て行った。

ふーふーと荒い息を吐きながら、赤い顔で男の背を睨みつけていた咲良は、男が扉の向こうに消えると、ばんっと勢いよく扉を閉め、王へ振り返った。

「ですから！　私には、自ら身を守る力もありませんし、警備とか、みんなの負担に――――」

「さくらさん！」

「さくら！」

「「さくちゃーん！」」

どーんと盛大な音を立てて、執務室の扉が開かれた。

そして、そこから雪崩込むように、四人の人物が室内へ駆け込んできた。

「さ……さくらさん！　えと……結婚おめでとう……！　僕……僕は、心から、……さくらさんの幸せを……うっ……祈ってるよ〜〜〜！！」

そう言いながら、ぼろぼろと涙を流す、ひょろりとした細い体に黒いマントを羽織った、黒髪赤目の男。彼は、純血でありながら、

血が苦手な菜食主義者で泣き虫の吸血鬼、サフィール・メティス・サルベリアテ・ヴラディスクアンモール。

「さくら！　こんな陰湿腹黒男と結婚すれば不幸になるだけだ！こんな顔と権力だけの男、ぼくは認めないぞ！」

そう言って、咲良にずずいと詰め寄ったのは、銀色の髪に新緑の瞳の、天使のような美貌の少女、ユーレナ・リグ・レィーダである。自分をぼくと言い、男の子のような恰好をしているが、その可愛らしさは輝くほどで、古のエルフ王の血を引く、エルフと人間のハーフだ。

「「わーい！　結婚おめでとー！」」
「お祝いだねー！」
「お祭りだねー！」
「「わーい！　楽しみだねー！」」

そうはしゃぎながら、咲良の周りをぐるぐると回っているのは、水色の髪に濃い緑色の瞳の、チック・シシズ、そして、同じ水色の髪に濃い青色の瞳のタック・シシズの双子だ。
この双子、二人で魔法を発動する場合には、鬼才と言われるほどの能力を持つが、それぞれ単独では魔法を発動できないという、変わった性質の持ち主である。

「うっるさあああぁぁぁい！！」

そんな四人に囲まれながら、ずっと下を向いて肩を震わせながら

黙っていた咲良が、いきなり両手を上へと突き上げ、大声で叫んだ。

「結婚なんて、しないって言ってるでしょ！！
それに！　ここは陛下の執務室なのよ！　ばたばた騒がない！」

ギッと、四人を睨みつけると。

「うわ～～ん！　ごめんなさ～～い！！」

泣きながら、吸血鬼サフィールが慌てて駆け出して行き。

「ちょっと、さくら、ぼくは……」

ハーフエルフのユーレナが気圧されたように後ずさり。

「「わーー！　さくちゃんが、怒ったーー！！」」

と、きゃらきゃら笑いながら、双子が執務室の扉から飛び出して行く。

そんな四人を追いかけ、咲良は、王に退室の挨拶をすると、執務室を飛び出して行った。

「お前らーー！！　教育し直しだ！　そこへ並べええぇぇぇ！！」

部屋の外から聞こえてくる、咲良の叫び声と、それに続く双子のきゃーっというはしゃぎ声。

「おいおい、どうしたさくら、あの日か？」

「セクハラあああぁぁぁ！！」

バシーンと何かを叩く音が、遠く聞こえてくる。

それらに、王は執務机に着いたまま、「賑やかだな」とくくっと楽しげに笑った。

「それで、お前は良いのか？」

王がちらりと、先ほど咲良が立っていた辺りに目をやると、いつの間にか、執事の格好をした、真っ白の髪にオレンジ色の目の、痩身の男が佇んでいた。

その男は、王の言葉ににこりと笑みを浮かべ。

「私は、我が君のお決めになったことに、逆らうつもりはございません」

その答えに、王が、「そうかよ」と鼻を鳴らすと、その男は笑みを奇妙に歪め、

「ですが、我が君を悲しませるようなことがあれば、誰であろうと容赦は致しませんが」

と、慇懃無礼に続けた。

この男の名は、モクレン。咲良がたまたま契約した、“禁忌の精霊”と言われる精霊であり、普段は咲良の影に潜んでいる。

この精霊は、戦闘・諜報・謀略・身の回りのお世話から夜の相手まで、何でも完璧にこなす万能に近い能力を持っているのだが、それゆえに人を狂わせ、欲望に溺れさせるということから、“禁忌”として、人々から忌避されてきたのだ。

それでは、と頭を下げて、モクレンは主である咲良を追うために、部屋から出て行った。

少し傾いている扉を見ながら、王は焦がれるように、口元を緩めて笑い。

「お前を傷つけることが出来る者など、どこにもおるまいよ」

・王妃の自己防衛力（後書き）

咲良が一番騒いでいるということは、スルーの方向で。

・王妃（未）の歌

咲良の周囲の人達は、咲良の歌が大好きだ。

白い雲がぽこぽこと浮かんだ、真っ青な空と、眩い日差しが降り注ぐ、この日。

咲良は、王宮の裏庭の一角、王にもらった小さな土地で、趣味の庭いじりに精を出していた。

木の柵で囲まれたそこに植えられているのは、色とりどりの野菜達だ。青々と色づいた葉と、水滴の輝く野菜の出来栄えは、もはや庭いじりというよりは、立派な家庭菜園である。

しかも、これらの野菜は、この国で一般的なものではなく、咲良がクロラムフェニルヴァイトに教えてもらったり、モクレンに見つけてきてもらった、地球のものに良く似た野菜達だ。トマトに似た紫色のもの、キュウリに似た黄色のもの、じゃがいもに似た赤いもの、など等、色はバラバラだが味は比較的地球のものに近かった。そこで、懐かしがった咲良が、自分で育てると言い出したのだ。

「〜〜〜♪　ヘイッ♪」

一人で作業をしているとき、咲良はつい地球の歌を口ずさんでいたりする。

この世界では、音楽は楽器で奏でるものであり、その曲に合わせ

て歌うという文化は無かった。だから、歌というものは存在していなかったのだ。
そのため、この世界で歌を歌うことができるのは、咲良だけだったりする。もちろん、咲良が歌を教えれば、他の者も歌えるようにはなるのだが。

咲良の歌う歌は、日本語、時には英語で歌われているため、咲良以外には歌詞は分からない。しかし、その歌の曲調からどのような感じの歌なのかは、大体分かった。

そして、咲良はその時の気分で、ＰＯＰだったり、アニソンだったり、学校で習った合唱曲だったり、童謡だったりと、様々な歌を歌っている。
時にテンションが上がりすぎて、調子っぱずれになったり、音程がおかしかったりすることもあるのだが、それも聞いている者達にとっては楽しくて仕方がないのだ。

しかし、咲良は人がいると恥ずかしがって歌ってくれないため、咲良の周囲の者達は、咲良に気付かれないよう、身を隠してこっそりと聞いている。

なので、咲良は知らない。

すぐ傍にある樹の幹の向こう側に、サフィールがいることも、樹の枝の上でクロラムフェニルヴァイトが昼寝をしていることも。
そして、裏庭に面した建物の二階の、咲良の畑をちょうど見渡せる部屋が、いつの間にか王の第二執務室になっていることも。

この大国を収める王は、窓の外から聞こえてくる咲良の元気な歌

声に、耳を楽しませながら、政務の書類に目を通していた。
今日はテンポのいい歌を歌っているらしく、窓から見える咲良は、頭を揺らしながらノリノリだ。
その様子に、目を細めて愛おしそうに微笑んで、王はまた書類へと目線を戻した。

そんな時。

「我が君。あと一時間ほどで、ハルラーサ夫人のマナーの授業です」

「あ！　そうだった！」

突然現れたモクレンの言葉に、咲良はぱっと顔を上げた。

「そろそろ支度をなさいませんと、また怒られてしまいますよ」

柔らかく促すモクレンに、咲良は「分かったわ……」と肩を落としながら、しゃがんでいた体を起こした。

それから、よっぽどマナーの授業が嫌いなのか、足を引きずるように歩きながら、咲良は一人呟くように暗い歌を歌いだした。

そんな彼女に、「分かりやすい」と、モクレンが口元を抑えて微笑んだのも、サフィールが呼気を漏らしたのも、クロラムフェニルヴァイトが目を閉じたまま口角を上げたのも、王が誰も見たことのないような柔らかい笑みを浮かべたのも、咲良は知らない。

・王妃（未）の歌（後書き）

ほのぼのな日常風景も好きなので書いてみましたが、読まれている方には、期待外れでしたら申し訳ありませんm（＿；）m

こんな感じで、短編形式で色々と書いてみたいと思います。

・王妃（未）の暗躍・その１

彼女は、不思議な女だった。

我が国――ジス・アナトナリア――は、ここ数年雨が少なく、作物が実らないため、国中が飢餓に瀕していた。

それにもかかわらず、王は国民の窮状を知ろうともせず、城に篭って豪遊三昧の日々を過ごしている。

美女をはべらせ、貴族の者達と夜会を開き、贅の限りを尽くしている。

このことは国民にも知れ渡っており、国民の中には王や貴族への鬱憤が溜まりに溜まり、暴動が起こる一歩手前まで来ていると言っていいだろう。

現に、街の警備兵と国に不満を持つ国民の間で、度々トラブルが生じており、我ら王国軍が駆り出されることも多くなってきている。

また、軍の兵士もそのほとんどが平民出身のため、国の現状と王や貴族の振る舞いに、腹を立てている者も数多くいる。

このままでは、いずれ国民による多くの暴動が起こるだろうと、糸が張り詰めるような緊張感が、ここ数日軍部の中に広がっていた。

しかし、その緊張状態にも、国の上層部は気づいていない。というより、全く関心を抱いていないようだ。

もちろん、このままでは危ないと、私とて何度も王に進言した。

けれど、王は寵姫と戯れながら、お前達で何とかしろと言うだけ

だ。暴動が起きた場合には、国民への武力行使も構わないとの命令には、我が耳を疑ったが。

国中が、重苦しく緊迫した空気に包まれている、そう感じていたある日、その女は突然現れた。

国民の暴動を警戒しつつ、街の状況をこの目で確認しようと、街に出ていたその日。

足を踏み入れた裏路地で、上質な白いマントを身に纏った黒髪の女が、俺の前で立ち止まり、「近々、大規模な反乱が起こるわ」と言った。

何を馬鹿げたことを、と顔を顰めた私に、その女は悠然と笑い、この街の外れにある一軒の宿屋の名を口にした。

「そこに、今回の反乱を主導している者がいるわ。ただし、彼を捕えるべきではない。彼は、現国王と亡き前王妃との間の王子。前王妃が、現王妃に暗殺された時に、一緒に殺されそうになったところを、彼の乳母の手によって逃がされ、今まで平民としてひっそりと生きていたの。」

彼自身も、自分の身分のことはすっかり忘れているけれど、とその女は付け足した。

女の言葉に、私は目を瞠った。

確かに、今から十六年ほど前、国王の正妃が急死された。その突然すぎる死に、不審に思う者は多くいたのだが、結局ほとんど調査はなされないまま、病死ということになったのだ。そして、当時三

歳だった王子も、同じ病気で亡くなったと言われていた。

疑わしげに睨みつけた私に、全く動じることなく、女は「直接会えば分かるわ」と言った。

「けれど、彼に会ったとき、貴方は決断しなければならない。――――現王につくか、それとも彼につくかを」

宝石のように光る漆黒の目を細めて、女はじっと私の心でも覗き込もうとするかのように、私の目を見つめてきた。

その眼差しに、言いようのない息苦しさを感じていると、やがて女はふっと目を伏せ、そのまま俺の横を通り過ぎて行った。

慌てて背後を振り返ったが、目線の先には人の行き交う大通りが見えるだけで、その女の姿はどこにもなかった。

その後、国軍の詰所に戻り、自分の執務室で書類の処理を行いながらも、私は先ほどの女の言葉が気になって仕方がなかった。

本当に、前王妃の王子なのであろうか。

もちろん、現国王と現王妃との間にも王子はいるが、現王妃は元は下級貴族出の側室であり、隣国の王女であった前王妃の方が身分は高かった。

また、おっとりと穏やかだった前王妃と異なり、現王妃は高慢で癇癪持ちであり、欲しいものは何としてでも手に入れ、気に入らない者には罵声を浴びせ暴力をふるうと聞いている。

本来、王を諌めるために様々な特権を付与されている王妃は、王の行為を諌めるどころか、その権限を使って横暴の限りを尽くして

いるのだとか。

そのため、国民の中では、今でも穏やかで慈悲深かった前王妃の人気が高い。

次期国王にと考えた時に、現王妃の王子と、前王妃の王子とでは、どちらを国民が支持するかは明らかであろう。

また、前王妃の子が王になれば、前王妃の祖国である隣国も、国を立て直すために色々と力を貸してくれるはずだ。前王妃は、父親である隣国の国王に、とても溺愛されていたという。

――――現王につくか、それとも彼につくか。

あの女の言葉が頭を過る。

私がそれを決めるということは、国軍の立場を決めるということになるだろう。

国軍の兵士の中にも、国の上層部へ不満を持つ者は多い。前王妃の王子の存在を明らかにし、彼を支持する旨を伝えれば、反対する者はほとんどいないと言えよう。

握った拳を額に当てて、私は深く息を吐いた。

判断を誤るわけにはいかない。

あの女の言うことが、全くのでたらめである可能性は大いにあるのだ。もしくは、何かの罠ということもある。

だが、どうしてもあの女の言葉を事実無根だと、切り捨てることができないのだ。

あの漆黒の瞳が目蓋に蘇る。不思議な引力を持つ女だと思った。

やがて、私は一つの決断を下した。

明日、あの女が言っていた宿屋へ行き、その首謀者の男と会ってみよう。

そして、その男が王子だと認められるかどうか、それによって、その後の判断が変わってくるだろう。

・王妃（未）の暗躍・その１（後書き）

いきなりシリアスですが、こんな話も書いてみたかったので……；

・王妃（未）の夜会（前書き）

こちらが先に完成したので、先にＵＰさせて頂きました。

・王妃（未）の夜会

いつもは静かな王城に、多くの馬車が出入りし、煌びやかな衣装を身に纏った男女が、アセスフィアの王城へと吸い込まれていく。

城内でも、落ち着いた動作ながらも慌ただしく侍女や近衛兵が行き交い、豪勢に飾り付けられたホールでは、すでに多数の料理が並べられ、国内でも有数の音楽隊が、優雅な音楽で場を盛り上げていた。

そんな、華やかに行われている国王主催の夜会の会場の片隅で、今回初めて夜会に参加させられた咲良は、王から贈られた最上級の青色のドレスに身を包み、給仕の者に渡されたグラスを片手に溜息を吐いていた。

これまで、身分が無いことを盾に夜会の出席を断っていたのに、ついにベルグラード公爵令嬢宛に、王から直々に招待状が届いたのだ。

どうせ城にいるのだから、こんな回りくどい真似しなくても……と、使者から手紙を受け取ったとき、咲良は眉間に皺を寄せた。

人のあふれる会場の中央辺りには行かず、壁際で所在無さ気に佇んでいると、そこここから、ちらちらと向けられる視線と、ひそひそと囁く声が聞こえてくる。

「ほら、あれが近々王妃になる予定の……」
「まあ、あのベルグラード公爵家の……？」

などと漏れ聞こえてくる言葉に、咲良は、何か着々と外堀を埋められている気がする……、と、不気味な危機感に背を震わせた。

肝心の主催者は、今は会場の真ん中、数段階段を上ったところにある王座に腰かけて、挨拶に来る者に鷹揚と頷いている。
時折咲良の方に視線を投げて、目元を緩ませているのだが、それに気づいているのは、王の傍に控えている宰相ぐらいである。

部屋の隅で今回の警備を指示しているクァルテも、ちらちらと咲良の方に視線をやって、咲良を気にしてくれている様であるし、影の中にいるモクレンからも気遣わしげな気配を感じるから、別に心細く思っているわけではないのだが。

私、ここで何してりゃいいの？　と、咲良が頭を悩ませていると、「あら？　あなたは……」と、高めの声が聞こえてきて、咲良はグラスに注いでいた目線を上げた。

すると、そこには、赤を基調としたドレスに金色の縦ロールの巻き毛の令嬢を真ん中に、その後ろに黄色と緑のドレスを纏った二人の女性が付き従って、立っていた。三人とも咲良と同じぐらいの年齢だと思われる。

「何か、私にご用でしょうか？」

信号みたいだな、と思いながらも、にっこりと笑って用件を問うた咲良に、真ん中の赤いドレスの令嬢は、持っていた扇子を広げ、

じろじろと咲良をねめつけながら、
「何でもございませんわ。ただ、身の程知らずにも、陛下に取り入ろうとする女狐を見に来ただけですもの」
と言った。
その言葉に、咲良はぱちぱちと目を瞬かせる。
「本当に、その程度の器量で、どうやって陛下に取り入ったのかしら？」
「きっと、人前では言えないような、技巧をお持ちなのよ」
くすくすと、赤いドレスの女性の背後に控えている二人が、聞こえよがしに言いながら笑う。
気が付けば、咲良とそれに対する三人の女性達の様子を窺うように、四人の周りから人が離れ、そこだけ空間ができていた。
ちょうど一通りの挨拶を終え、王座の階段を下りてきた王も、咲良の周りのただならぬ気配に、慌ててそちらに向かおうとし……。
咲良の目を見た瞬間に、足を止めて溜息を吐いた。心配そうに窺っていた宰相も、やれやれと困ったような笑みを浮かべる。
何故なら、咲良の目が、とっても楽しそうに輝いていたからだ。
だが、そんな咲良に気付かず、令嬢達は、何も反論してこない咲良に気を大きくしたのか、言葉を続ける。
「陛下をどのように唆したのか分かりませんけど、あなたが王妃に

なれるはずがありませんわ」

赤いドレスの女性が、ばさっと扇を振り上げながら、胸を張って言い放つ。

「何故ならば、王妃になるのはオルセット侯爵家のこの私ですもの！　どこの馬の骨とも分からないあなたなど、王妃に相応しくありませんわ！」

女性の言葉に、お付の黄色と緑のドレスの女性達が、「その通りよ！」「身の程を知りなさい！」と囃し立てる。

咲良はもはや、どこぞの舞台を見ている気分だ。

空気を読んでいなければ、やんややんやと拍手でもしたい気持ちである。

「それに、陛下があなたに何を言ったか知りませんけど、陛下が本当に愛しているのは私ですのよ！　あなたのことは、ほんの暇つぶしのお遊びですわ。

分かったなら、直ぐに陛下の前から消えなさい。さもなければ、その身に何が起きるか分からなくてよ！」

赤いドレスの女性が、ほほほほほ！　と見事な高笑いをすると、お付の二人も「そうよそうよ！」「さっさと城を出て行きなさい！」と声を上げる。

そんな三人を前に、咲良は、内心で大変はしゃいでいた。

（す……すごい！　完璧だわ！　その、聞けば聞くほど、逆に陛下

を貶してないか？　とも思える言葉。強烈で根拠のない自己主張。日本だったら、ちょっと危険視されそうな思考。そして、お付の者との見事な連係プレー。なんて完璧ないびり役なの！　本当にこんなイベントが起こるなんて、さすが異世界！　ブラボー異世界！　一度は言われてみたかったのそのセリフ！　どうしよう、記念に録画したい！　あああああ！　ケータイ持ってきとけばよかったあああ！）

まるで道を歩いていて、有名芸能人のロケ現場に出くわしたかのような、興奮っぷりである。

しかし、その一方で、表面上における対処の仕方も考えていた。選択肢1は、「その言い方は、陛下をも貶めるものですわよ」と、強気に出てみる。

選択肢2は、彼女達の言葉に怯え打ち震え、ショックを受けたふうに俯いてみせる。

（う～ん、これって、どっちが正しい攻略方法？

もし、選択肢1を選んだら、下手したら掴み合いの喧嘩かしら？　どうしよう、私、人を素手で叩いたことないんだけど。え？　じゃあ、何でなら叩いたことあるのかって？　いや～それは、また今度、機会があればってことで。

じゃあ、2かな～。思い切って、ちょっと涙でも見せてみるとか。泣けるかなぁ、今。あ、こんな時はフラ○ダースの犬を思い出せばいいのか。あの最後は泣ける！　動物ものには本当に弱いのよ、私の涙腺。う……いかん。もう鼻の奥がつんとしてきた。パト○ッシュううぅぅ！）

「何をしている」

咲良が二択で悩みつつ、若干涙目になっていると、低い威厳を感じさせる声が、割って入ってきた。

「まあ、陛下」

王を前にした赤いドレスの令嬢が、すかさず王に近づき、しなを作ってその胸に寄り掛かろうとする。

「何でもありませんわ。ただ、この身の程知らずな娘を、諌めていただけですわ」

そう言う女をさり気なくかわしながら、王は咲良の方に顔を向ける。

そんな王に、咲良はにっこりと笑って。

「お心配り痛み入ります、陛下。ですが、どうぞお捨て置きくださいませ。私、今、異世界トリップのイベントに直面しておりますの」

「何だ、そのイベントとは？」

ふふふ、と楽しそうに笑う咲良に、王もどことなく気を抜きながら、問いかけた。

「以前読んだ異世界トリップもののお話に書いてあった、トリップした主人公が、かなりの高確率で直面するイベントです。

主人公が、身分のある美形の人物に招待、もしくはパートナーとして、このような夜会に呼ばれた時に、その人物に好意を寄せる女性に絡まれるのです。

その女性は、たいてい貴族の令嬢で、蝶よ花よと育てられ、幼い頃より、周囲から「誰々の妻になるのはお前しかいない。お前が誰より相応しい」と言われて育ってきたため、自分でもその通りだと思い込んでいたりします。
しかし、肝心の相手の方は、その令嬢が苦手だったり、歯牙にもかけていなかったりするんです」

「よく知っているな」

咲良の言葉に、王は驚いたように頷いた。

いつの間にか周囲にいた人々が、密かに咲良の言葉に耳を傾けているのだが、咲良は気づくことなく先を続けた。

「そして、これはその女性の身分や性格によりますが、大体においてそのイベントの後に、一人で人気のないところに行くと、その女性の雇った者達に誘拐されてしまうのです」

その咲良の話に、赤いドレスの令嬢が目を見開き、顔を青くしたのを、王は見逃さなかった。

「そうですね……、この城の今夜の警備状況や照明の具合から、中庭辺りが怪しいですね。この時点ですでに潜んでいる場合が多いです」

咲良が頬に手を当てながら首を傾げる。
扇を握り締め小刻みに体を震わせた令嬢を、目の端に捕えながら、王は傍に来たクァルテに中庭を見てくるよう指示している。頷いたクァルテは、数人の部下を連れて、部屋を出て行った。

「まあ、警備状況がどこから漏れたのか、おおよそお金で買収された内通者がいたりするんですが。
それはさておき、そのまま攫われた主人公は、街外れか山奥の廃屋に連れて行かれ、その後は、後でやって来た主犯の女性に痛めつけられて、殺されそうになるか、どこかへ売られてしまいそうになるんです」

咲良の言葉を聞いた王が、遅れてやって来た宰相へ、内通者を探すよう指示する。王の言葉に、宰相は王に頭を下げて、部屋の奥へと歩いて行った。

「そして、主人公が絶体絶命！　ってところで、救い手が現れて助けてくれるんですけど。たまに、間に合わないパターンもありますね」

うんうんと頷いた咲良の腰に手を回し、王は咲良にそっと顔を寄せながら、
「もしお前が攫われた時は、俺が必ず助けてやる」
それ以前に、攫わせなどしないが、と、甘く囁いた。

だが、そんな王に、咲良はう～んと首を捻りながら、「そう言うヒーローに限って、遅れて来るんですよね」と苦笑いをしている。

ふと音楽が止んだとき、城の外、中庭のある辺りから僅かな金属音と喧騒が聞こえてきた。
そして、いつの間に戻ってきていたのか、宰相が何事かを王に耳打ちする。

「さて、デラメリア嬢。少々お話を伺いたい。別室まで来て頂こう」

王が、すでに顔色を無くし、倒れそうなところをお付の二人に支えられている、赤いドレスの令嬢に向かって、冷たく言い放つ。

そして、宰相に目配せをすれば、宰相は頷き、数人の兵士を連れ、令嬢を取り囲んだ。

「陛下！　わたくしは！」

悲痛に叫ぶ令嬢に対し、王はもはや目も向けなかった。

一部始終を見守っていた人々の中で、自然に開いた道を引きずられて行きながら、しきりに王を呼ぶ令嬢の声が響いていたが、それもやがて治まり、会場は静まり返っていた。

そんな中、単に読んだ話の説明をしていただけのつもりの咲良は、え？　どうしたの？　と状況がよくわかっておらず、きょろきょろ辺りを見回していたが、しばらくして「あ！」と声を上げ。

「それから、一人になった主人公に、どこぞの女好きの男が口説いてくるパターンもあるんですよ」

まあ、私には可能性の低いイベントですけどね～。そう言って、からからと笑った咲良に、王は眉間に皺を寄せて、咲良を抱き寄せる腕を強くした。

「お前は、俺の傍から離れるな」

その後、王の咲良への溺愛っぷりと共に、未来の王妃には先見の力まであるのではないか、との噂が国中を駆け巡り、ますます咲良の信奉者が増えたとか。一部の後ろ暗いことのある人々が、全てを諦め、自首・自供したとか。

そんな事情も、結局、咲良は知らないままだった。

・王妃（未）の狩り（前書き）

すいません。他のお話がなかなか進まないので、今回は少し短いお話です。

・王妃（未）の狩り

『巨大で凶暴な野生の動物が、畑を荒らして困っています。なにとぞ、対処をお願い致します』

そんな文章の書かれた書類を王から手渡されて、咲良は首を傾げた。

「どうして、これが私のところに回って来るんですか？」

不思議そうに書類を見ている咲良に、王は苦笑いを浮かべて。

「おそらく、動物への対処法として、お前の世界の知恵を借りたいと言ったところだろう」

「え～？　私の世界での、私の知っている対処法なんて、柵を作るとか、大きな音を出すとか、猟友会の人にやっつけてもらうとか、そういったものですよ。こっちの世界と、あまり変わらない気がしますが……」

困ったように、咲良は眉間に皺を寄せた。

仮に、その動物を退治するにしても、まあ普段は大剣の使い手だが、普通の剣も使えるクァルテや、暗器の得意なモクレンは別として、クロラムフェニルヴァイトの攻撃手段である火炎弾は、どんなに威力を押さえても半径数百メートルの範囲を焦土にする威力だし、

双子は面白がって規模の大きい魔法ばかり使うし、ユーレナの場合は、精霊達が張り切ってどうしても精霊術の威力が大きくなってしまうし、普段のサフィールは戦えないし。動物一体一体を倒していくには、どうにも適さない気がするのだ。

「その動物の住処もまとめて、この辺り一帯を壊滅状態にするんでしたら、うち向きかもしれませんけど……」

むむむと首を傾げた咲良に、王はくっと口元を上げて、「その方が楽なら、そうすればいい」とさらっと言った。

「いやいやいやいや！　しませんから！」

つい漫才師のように手の甲でつっこむ動作をしながら、咲良は再び手元の書類に目をやった。

いったいどんな動物なのだろうと、書類をめくると、そこには参考までにとその動物の絵が描かれていた。

大きな丸い形に、短い四肢、産毛程度しか生えていない柔らかそうな体に、突き出た鼻。その動物は、まさに地球でいうところの――。

「……豚……」

咲良はぽつりと呟いた。

その色こそ、キリンのような黄色と茶色の斑模様だが、絵で見る限りはどう見ても豚だった。大きさは、よく目撃されるもので三メートルはあるらしい。

その時、咲良の目がきらりと光った……気がした。

「陛下！　私、この豚を直接食べてみ……じゃなくて、見に行ってきます！」

そう、すちゃっと敬礼のポーズをして――ちなみに、この国の形ではない――、早足で王の執務室を出て行った。

そんな咲良を、王は執務机に肘をついて、楽しそうに見つめていた。

「クァルテ！　モクレン！　ちょっと私と来てくれる？」

「ええ、良いわよ？」

「どちらまでもお供します」

城内で見つけたクァルテとモクレンに声をかければ、クァルテは首を傾げながら、モクレンは当然とばかりに、頷いた。

「クロラムさーん！　カンディー地方まで乗っけてってー！」

そして、城の屋根の上で寝ていたクロラムフェニルヴァイトを呼べば、「俺はお前の乗り物か」と文句を言いながらも、身軽に屋根の上から下りてきた。

「いざ豚肉ゲットに行くわよ！」

事情を説明する前に、クァルテ、モクレン、クロラムフェニルヴ

ァイトを引っ張って、咲良は嬉々として動物退治に向かった。
竜体となったクロラムフェニルヴァイトの背中で、咲良はしきりに「生姜焼き、生姜焼き～♪」と鼻歌を歌っていた。

やがて到着した現地で、クァルテによって倒され、モクレンの手で見事に捌かれ料理された、その動物は、咲良いわく地球のものに比べればちょっと硬かったけど、でもとても美味しく頂けたらしい。

その後、その動物の肉料理が、アセスフィア王国の特産品の一つとなり、その動物の捕獲が、（王命によって）兵の訓練の一環に加えられたため、問題は無事解決し、農村の人達からとても感謝されることになった。

何より、その肉料理を、懐かしみながら嬉しそうに食べる咲良に、王やみんながほっこりしていたとか。

・王妃（未）の嫉妬

その日、心地よい暖かさの日光が燦々と降り注ぐ城の中庭で、咲良は固まっていた。

その目線の先は、中庭に面した渡り廊下であり、そこに佇む一組の男女に向けられていた。

長身の、多くの女性の心を奪ってきた見目麗しい美丈夫の胸元に、彼の胸ほどの身長の、赤色の髪が美しい女性が顔を付けている。

一方の男性も、女性の括れた腰の辺りに手を置いている。

一見すると、白昼堂々の、美しい男女のラブシーンである――のだが。

咲良の位置からは、女性の背中と、彼女を抱き寄せる男性の顔が正面から見えた。

さらに、その男性の顔には思いっきり見覚えがあった。

それは、普段から何かと咲良に構い、愛を囁いてくる、この国の王であったからだ。

そして、そこは固い貞操観念のもとで育ってきた咲良である。日ごろから自分を好きだの愛しているだのと口説いてくる、しかも咲良も憎からず思っている相手が、見知らぬ女性と抱き合っている姿を見れば、それなりにショックなり嫉妬心なり、湧き上がってしかるべきなのだが。

そのラブシーンを見た咲良は、固まりはしたものの、特に嫉妬心

などは生まれてこなかった。

何故ならば――――。

（み……見てる。めっちゃ見てる！！）

女性を抱き締めている王の顔が、しっかり咲良の方に向けられていたからだ。

仮にも身を寄せ合う男女ならば、腕の中にいる女性の方に顔を落としているのが普通であろう。

しかし、王は顔を上げ、顔も目線も微動だにせず咲良に向けられているのだ。まるでその一挙一動を観察するかのように。

咲良は蛇に睨まれた蛙のごとく、冷や汗をだらだら流しながら固まっていた。

（……え？　何これ？　もしかして、嫉妬イベント？　しかし、この状況だとどう考えても嫉妬心なんて浮かび上がって来ないんだけど。むしろ、陛下が抱き寄せてるのが人形に見えてきた……それはそれで危ない人だけど。いやいやいや、どうせならもうちょっと意味深な雰囲気を出すとか！　顔も無表情だし。女性との逢瀬を見られて、あ、やべ、って焦った顔でもないし！　あああ、どうしろと？　この状況を、私にどうしろと！？）

足はその場に縫い付けられているかのように動かないし、目線も王の眼力から逃げられないしで、咲良は必死に、この場合の無難な対処法を考えていた。

対処法1は、何事も無かったかのように、このままここを通過する。

対処法2は、顔を青くしショックを受けたふうを装って、逃げるように早足でここから立ち去る。
対処法3は、嫉妬に顔を赤くし、王と女性との間に割って入る。
（いや、まず1はやばい。このまま素知らぬ顔をして通り過ぎたら、無視されたと怒り狂った陛下に後で何されるか分からないし。いじけられても厄介だし。
3もなぁ。なんて言いながら割り込めばいいの？　「私の陛下に触らないでぇ～！」とか？　あ、無理。私のキャラ的に無理。そもそも、嫉妬で怒った演技が私に出来るとは思えない。
やっぱり、2がベストかしら。一応の嫉妬心をアピールしながらも、無難にこの場を立ち去れるし。よし、じゃあ、頑張ってショックを受けるぞ！　えっと、昔見たグロい映画のシーンでも思い出せば……う、本気で気分が悪くなってきた……）

しかし、なんて手のかかる子……！　と思いながらも、咲良が王から視線を外して俯き、口元を押さえて立ち去ろうとしたとき、目の前がふっと陰った。

「あれ～？　君、どうしたの？　気分悪いの？」

いかにも軽そうな声に、咲良が顔を上げると、そこには坊ちゃん風の、細身のへらへらした身なりのいい男が立っていた。

「……いえ、大丈夫です。このまま部屋に戻りますので……」

お気遣いありがとうございます、と対処に困りながら、咲良が小さな声で答えると、男はぐっと咲良の肩を掴み。

「じゃあ、ぼくが送って行ってあげるよ～。途中で何かあったら大

変だしね～」

言っていることは親切かもしれないが、その顔はにやにやと咲良を見回し、肩に置かれた手も、肩と腕の辺りを行ったり来たりと、動きが怪しい。

その馴れ馴れしい様子がやけに粘っこくて気持ちが悪く、咲良がぐっと顔を上げて断ろうとしたとき。

咲良は、再びぴきーんと固まった。まるでメデューサに石にされたかのごとく、見事に固まった。目線は男の背後に固定されたままである。

冷やりと冷たい空気が頬を撫でた、気がした。

自分を見上げたまま動かなくなった咲良に、男が不思議そうに首を傾げながらも、咲良の腰に腕を回そうとした、のだが。

次の瞬間、咲良の目の前から男が消えた。

時を置かずして、中庭の端、城壁に添って植えられた木々の方から、バキバキと枝の折れる音と葉の擦れる音が聞こえてくる。

そして、咲良の視界は、精巧な装飾がなされ、質のいい布で仕立てられた服を纏った、冷徹な目の王で埋まっていた。

腰の剣は抜かれた様子が無いから、きっと蹴りであの男を吹っ飛ばしたのだろう。

何を隠そうこの王は、剣術よりも蹴り技の方が得意なのだ。その長い脚から繰り出される蹴りは、目にも留まらぬ速さと生身とは思えない威力で、並み居る敵をなぎ倒す。さらに、そこに魔法を使っ

て強化すれば、鉄を砕き、剣ですら弾いてしまうほどである。
以前、その足技を見た咲良が、かっこいいと褒め称えたため、次に戦に出た時は、足技で戦うと宣言したこともあるのだ。
さすがに一国の王が、先陣を切って敵兵を蹴り飛ばす姿はいかがなものかと、宰相達を悩ませることになったのだが。

目の前に立ちそびえる王の目線は、茂みに弾き飛ばされた男の方に向けられており、すっと細められた目と、ゆらりと動いた体に、咲良は男の命の危機を察した。
慌てて、王の手をがしりと両手で掴む。

身長の違いから、見下ろすように向けられた薄氷色の瞳に、咲良は必死に表情筋を動かしてにこりと笑い。

「え、えっと、私これからお茶にしようと思うんですけど、陛下も一緒にいかがです？」

見知らぬ彼の身の安全が確保されるまではこの手は離さないぞと、ぎゅっと握り込まれた手と、咲良の顔を交互に見た王は、「そうするか」と素直に頷いた。
その意識から先ほどの男のことが抜けたことが分かり、咲良はほっと息を吐いた。もともとあまり他人に興味のない王である。その他人を意識から排除してしまえば、これ以上危害を加えることは無いだろう。

踵を返す時に目の端に映った、さっきまで王が抱き締めていた女性と、茂みに埋もれた男に、心の中で詫びつつ、王の手を引きながら、中庭の奥、イスとテーブルの備え付けられた白磁の小屋の方へと歩き出す。

「今日のお茶請けは、女官のみんなと作った地球のお菓子なんですよ」

楽しそうに話す咲良に、王も柔らかく目元を緩めた。咲良の手を、包み込むように握り締める。

そのお菓子の主な部分はモクレンが作ったのだが、そのことを口にしなかったのは、英断であったと言えよう。

仄かに花の香りのする風が、仲良く手を繋いで歩く二人を心地よく包む。今日も平和な一日だった。

（結局、嫉妬イベントは完了したことになるのかしら……？）

咲良はそっと首を傾げた。

・王妃（未）の嫉妬（後書き）

王様は、たまに愛ゆえの不可解な行動をします。

・王妃（未）の誘拐

咲良は、元は地球の一般人であるが、この国に来てからは、多くの人々に、ごくまれに神の世界からやってくる稀人として崇められ、その斬新な考え方と慈悲深さ、そして、魔力以外の未知なる神の力を有する者として、世界中に多くの信者を有している。

また、世界最強と謳われる部下を持ち、大国の歴史上至高の王から寵愛を受ける者としても、広く知られていた。

まあ、神の力云々は、古くからの伝承と周囲の思い込みが生んだ勘違いで、この世界に来たとき咲良はこの世界の言葉を話せなかったため誤解を解けず、噂の内容が理解できるようになったときには、世界中に噂が広がりすぎて撤回が不可能という状況によるものなので、事実咲良はそのような力を持たないのだが。

とにかく、そんな境遇にある咲良であるから、その身を手中に収め、意のままに操ることができれば、世界を手にすることも夢ではないと考えられている。

また、その世界でも稀な漆黒の髪と目は、観賞用としてコレクターの欲を誘い、一部の者の間では、その血肉には不老不死の力が秘められていると、信じる者もいるほどである。

つまり、咲良を誘拐しようと企むものは多いのだ。

それこそ、権力を望む国内外の貴族――国内の者はあらかたは王によって排除済みであるが――や、金を持て余した富豪、一獲千金を狙う犯罪組織などに、何度も誘拐を試みられている。

しかし、咲良がこの世界に来た当初はともかく、確固たる地位を築いた現在では、それは一度たりとも成功していなかった。むしろ、咲良の半径三メートルにさえ、近づくことは出来なかった。

ある日、咲良はモクレンをお供に、アセスフィア王国の城下街をふらふらしていた。

そんな咲良を、物陰から窺う十人前後の男達がいた。

「おい、あれが例の女で間違いねぇか？」
「ああ、あの黒髪間違いねぇ。あの女が手に入るなら、小国が買えるくらいの金を払うって奴もいるらしいぜ」
「あんな小娘一人にか！？　そりゃすげえ！　是非とも、掻っ攫ってこねぇとな」

ひそひそと交わされる会話が、静まり返った路地に漂う。
ちょうど建物と建物の間で、奥まって影になっている場所に身を潜めているため、道を通り過ぎる人々は誰も注意を払ってはいなかった。

「隣の奇妙な髪の野郎は誰だ？」
「知らねぇ。使用人か護衛あたりだろう」

この人数でかかれば問題は無いだろうと、男達は互いに顔を見合わせながら頷いた。
そしていっせいに、路地から足を踏み出そうとした、その時。

「あらぁ。こんなせまっ苦しいところで、むさい男どもが寄ってたかって、何のご相談かしら？」

妙にテンションの高い声が男達の背後から聞こえ、男達はぎょっと後ろを振り返った。

三方を高い壁に囲まれた袋小路状の通路の奥には、がっしりとした体つきの、騎士服を身に纏った金髪の男が、悠然とした笑みを浮かべて立っていた。

「っ！　てめぇ！　いつの間に！」

男達の一番後ろにいた男が、驚いた勢いのまま怒鳴る。

そんな男の様子に、金髪の男――クァルテ――は、肩を竦めて。

「さっきからずっといたわよ。あなた達が、悪い相談をしていた時から、ずっと、ね」

その鮮やかな緑色の目をすっと細めて、クァルテは意味深にそう答えた。

それを聞いた男達の表情が、途端に剣呑なものに代わる。

「聞かれちまったらしょうがねぇなあ。ここで死んでもらおうか」

「あんたも運が悪かったなぁ」

そう言いつつ、下卑た笑みを浮かべながら、男達がそれぞれの武器を手にする。

そんな男達を正面に見据えながら、クァルテはすっと頭の後ろへ

と手を回した。
そして、シュルッと皮が擦れる音をさせながら、背中に背負っていた、幅二十センチ程度、長さは身長ほどもある大剣を、よどみない手つきで抜いた。
そのクァルテの大剣を見て、男達の表情が強張った。中には真っ青な顔で後ずさる者もいる。
「お前、もしかして、大剣の……」
「さくらちゃんを攫おうなんて、とんだ身の程知らずね。たっぷり、お仕置きしてあげるわ」
きりっとした精悍な顔に妖艶な笑みを浮かべて、クァルテが大剣を構える。
「くそっ！　この人数に勝てるわきゃねぇ！　やっちまえ！」
リーダーらしき男の掛け声とともに、男達がいっせいにクァルテに切り掛かる。そんな男達にクァルテはくすりと笑い。
「えー、こちらクァルテ。人身売買組織のメンバーを捕まえたから、警備兵を数人寄越してちょうだい。場所は――」
数分後、風の魔法を使った通信機に向かって、そう連絡をするクァルテと。
その足元には、先ほどの男達が全員気を失って倒れていた。

「あんた達なんかには、指一本だって触れさせはしないわよ」
倒れた男達を見下ろしながらそう言い、クァルテは路地の向こうの大通りに目を移した。

また別の日、咲良はユーレナと一緒に城下街で買い物を楽しんでいた。
そんな咲良を、空き家の中から窺う7・8人ほどの男達がいた。
「あれが、サクラ・ミナセ・ベルグラードだな」
「伯爵のご命令だ。無理やりにでも連れて行くぞ」
その声に小さく頷いた男達が、空き家を出ようと扉に手をかけようとしたとき。
「そうはいかないよ」
硬質な男の声が聞こえて、男達は慌てて家の中を見回した。
「な……何者だ！？」
だが、空き家の中には男達以外誰もおらず、男達が不可解そうに互いの顔を見合わせたとき、家の天井辺りから黒い霧が染み出してきた。

やがて、その霧が床の辺りまで下りてきたとき、黒い霧が円柱状に渦を巻き、やがて凝縮したかと思うと、そこに一人の細身で長身の男が立っていた。
その全身は、真っ黒なマントで包まれ、ゆっくりと顔を上げた男の漆黒の髪の間から、血のように真っ赤な瞳がのぞいた。

「貴様は、サクラ・ミナセ・ベルグラードの――――――！！」

男達が手を武器にかけ、何かを言いかけたとき、ぐらりと彼らの頭が揺れた。
男達の目はじっと漆黒の男――サフィールを見ているのだが、やがてその瞳から力が抜けていき、ぼんやりと何も映していないかのような濁った色になる。
目蓋も半分下り、体も力が抜けたようにただ立っているだけで、全員が武器から手を離し、手を下に垂らしている。

男達全員がそのような状態になったのを確認して、サフィールは心の奥に入り込むような幻惑的な声を発した。

「あなた達の任務は無事完了しました。これから、命令をした者に、報告に行くのです」

エコーのように響いた声に、それを聞いた男達が、何かに操られるように、ぞろぞろと空き家の裏口から出て行く。

「よう。大本を潰しに行くのか？」

そんな男達を静かに見送っていたサフィールに、低い陽気な声がかけられる。

サフィールがゆっくりと振り返れば、そこには空き家の扉に手をかけたクロラムフェニルヴァイトが、いつものにやけた顔で立っていた。

「……うん、その方が……手っ取り早いし……」

途端に、おどおどと挙動不審になったサフィールを見ながら、クロラムフェニルヴァイトは、「んじゃ、俺も行くかな」と首の後ろを掻いた。

「戦いになったとき、お前困るだろう？」

大人の貫録を感じさせる顔でそう言われ、サフィールは戸惑いながらも、こくりと頷いた。

普段のサフィールは血が苦手で、戦うことを非常に恐れるため、戦闘になったときはどうしようかと困っていたのだ。

そんなサフィールの恐れを知ってのクロラムフェニルヴァイトの申し出に、サフィールはほっと体から力を抜いた。

「クロちゃん、サーちゃん！」

「悪者退治に行くんでしょ？」

「「僕らも行くーー！！」」

そう言いながら元気に飛び込んできたのは、チック・タックの双子である。

双子はそのままクロラムフェニルヴァイトの腰に纏わりつき、

「「ねーねー、ふっ飛ばしちゃってもいい？」」

なんて、きゃらきゃらと笑っている。

「あー……、周りに何も無かったらな」

そう苦笑いをして、腰に双子を纏わりつかせたまま、クロラムフェニルヴァイトは男達の出て行った裏口へと向かった。

「ほら、早くしねぇと見失っちまうぞ」

「う……うん」

そんなクロラムフェニルヴァイトと、双子に続いて、サフィールは空き家を出て行った。

その後、街の外れの、貴族の屋敷が立ち並ぶ辺りで、盛大な爆音が上がったとか。

「うちの大事な姫さんなんでな」

「「さくちゃんをいじめる奴は許さないよー！」」

「さくらさんは……僕が、守る……！」

また別の日、咲良は城下街の中央から外れた、人通りの少ない道

を歩いていた。
そんな咲良の前にバタバタと足音を立てながら、十数人の男達が立ちはだかった。
「嬢ちゃん、大人しく俺達と来てもらおうか！」
そう言って、咲良を捕まえようと足を踏み出した先頭の男が、次の瞬間には宙を舞った。
そして、道の端に置いてあった木箱に盛大にぶつかり、ばらばらと破片を飛び散らせたまま動かなくなる。
それを目にした他の男達が、驚愕の表情で咲良の方に目を向けると、彼女を背にかばうようにして、長身の男が立っていた。
一般国民の服を纏い、深く帽子を被ったその男は、ぎろりと氷のような鋭い視線を男達に向け。
「咲良とのでぇとの邪魔だ。さっさと消え失せろ」
その男、お忍びで咲良とお出かけ中だった王が、感情の篭っていない美声でそう言ったかと思うと、彼の正面に立っていた男達がさらに三人吹き飛んだ。
やがて、一分もしないうちに、男達は全員地面に倒れ伏していた。
「さあ、でぇとの続きだ。咲良」
そんな男達にもはや欠片の興味も向けず、王が咲良の手を取って

先へと促す。

その一部始終を戸惑いの中で見ていた咲良は、困ったように首を傾げながら。

「でも、彼らはこのままでいいんですか？」

「ん？　……ああ、そいつらはモクレンが片づけるだろう」

王がそう言うのと同時に、咲良の影からすっとモクレンが姿を現した。

「私は、あなたの部下ではないのですが」

そう溜息を吐きながらも、モクレンは建物等の影の中に男達を沈めていく。

「ごめんね、モクレン。ありがとう」

そう言って咲良が笑いかけると、モクレンも柔らかな笑みを浮かべ、「大したことではございませんよ」と答えた。

そうして、王と咲良が手を繋いで歩いて行くのを見届けたモクレンは、そっと影の方に目をやり、にやりと蠱惑的な笑みを浮かべ。

「さて、今回は私の出番はありませんでしたが、我が君を狙ったこと、しっかりと後悔させて差し上げましょう」

・クァルテと宰相

咲良がこの世界に来て半年ほど経ち、ようやく言葉も憶えて、心強い仲間もできた頃、クァルテと王の補佐をしている宰相は仲が悪かった。

いや、仲が悪いというより、宰相がクァルテを一方的に嫌っているようだった。

「まったくお前は、まだそんな喋り方をして、恥ずかしくないのか！」

「……うん、ごめんね」

「お前のような奴が、軍人など務まるのか？」

「……うん……」

「軍人など止めて、さっさと田舎にでも篭ってろ」

「……」

最初、廊下で何の反論もしないクァルテに、そんな暴言を吐いている宰相を見たとき、咲良は心底腹が立った。

クァルテは、この世界に来て右も左も分からなかった頃から、何かと咲良の面倒を見てくれる兄（姉？）のような存在だった。

そんな彼が、同じくらいの身長の宰相を前に、体を縮こまらせて俯いている姿は、見てられなかった。

だから、クァルテから離れた宰相を追いかけて、文句を言ってやろうと思って、足を踏み出そうとしたとき、未だその場に俯いて立ったままのクァルテを、ちらりと肩越しに盗み見た宰相の表情に、目を瞠って立ち尽くしてしまった。

そこは、二つの建物を繋ぐ渡り廊下で、咲良は渡り廊下が面していた中庭から、たまたま見かけた二人の様子を窺っていたので、クァルテも宰相も咲良の存在に気づいていないみたいだった。
そのため、その場でその宰相の表情に気付いたのも、咲良だけだった。

咲良はその後、王に、宰相はどんな人物かを聞きに行った。
「何故そんなことを聞く」「あいつが気になるのか」としつこく問い質してくる王に対し、繰り返し宰相への好意を否定しつつ、簡単に事情を説明すれば、王は未だ不服そうな顔をしながらも、宰相とクァルテのことをいくつか教えてくれた。

王に聞いた話によると、クァルテと宰相は、共に幼い頃親を亡くし、孤児院にいたらしい。
しかし、ある時、宰相は子どものいなかった有力貴族のもとへ養子として引き取られ、その後二人は会っていなかったのだが、宰相はやがて王の補佐として城にあがり、その後軍人になったクァルテと再開したのだそうだ。
そして、再会した時から、二人はあんな様子らしい。
孤児院にいた時の二人がどのような関係だったのか、そこまでは王も知らないとのこと。

けれど、その後に王が話してくれた話に、咲良はやっぱりね、と頷いたのだった。

後日、咲良はお節介かもしれないと思いつつも、クァルテが悲し

そうにしている姿を見たくなかったので、思い切ってクァルテに宰相のことを問いかけてみた。
宰相の話が出た途端、クァルテは顔を曇らせ、寂しそうな笑みを浮かべながら、ぽつりと呟いた。
「あたしがこんなんだから、嫌われちゃったんじゃないかしら」
そんなクァルテに、咲良はあることを持ちかけた。

ある日、クァルテは以前と同じ渡り廊下で、宰相に出くわした。
そして、クァルテと、クァルテの二の腕に巻かれた包帯を見た宰相は、ぐっと眉間に皺を寄せ、クァルテを睨みつけた。
「怪我をしたらしいな」
「……ええ」
クァルテは気まずそうに、包帯が巻かれている腕を手で擦った。
それは、数日前の訓練で、武器の操作を誤った部下を庇って負った傷だった。
「そんな状況で、訓練など出来るのか」
≪訓練なんかして、もう怪我は大丈夫なのか？≫
宰相の声に被るようにして、クァルテの頭の中にクロラムフェニルヴァイトの声が響いた。

その声に、クァルトはさり気なく宰相が歩いてきた側の、建物の影に目を向けた。
そこには、トーテムポールのように縦に並んだ咲良とクロラムフェニルヴァイトが、こっそりと顔を覗かせていた。
ちなみに、にっこり笑顔の咲良が上で、呆れ顔のクロラムフェニルヴァイトが下である。

実は今回咲良が提案したのは、宰相の本音――というか宰相の言葉を、咲良が解釈したもの――を、クロラムフェニルヴァイトが、その相手の頭の中に語りかけるという能力で、クァルテに伝えるというものだった。

咲良曰く、宰相は、自分の気持ちを素直に口に出来ず、ついきつい口調になってしまっているだけで、決してクァルテを嫌っているわけではない。なので、試しに自分が宰相の本音と思われるものをアテレコしてみせるので、その言葉を聞きつつ、宰相の表情をよく見てみてほしい、とのことだ。
とりあえず、一度自分を信じてほしい、という咲良の言葉に、クァルテは首を傾げながらも頷いたのだが。

「そんな状況で訓練に戻ったとしても、他の者の迷惑になるだけだろう」

≪怪我がちゃんと治るまで、休んでいた方がいいんじゃないか？≫

きつい眼差しで、クァルテを睨みつけながら言われる言葉に、咲良の意訳はやっぱり間違っているのでは、とクァルテはひっそりと苦笑いを浮かべた。

「大体、訓練で怪我をするなど、軍人に向いてないんじゃないのか」

≪そもそも、君に軍人なんて危険な仕事は向いてないんだよ≫

「どこか安穏とした辺境にでも引っ込んでた方が、よっぽど国のためになるだろうな」

≪もっと安全なところで、ゆっくりと暮らしてほしいんだ≫

それでも、顔を背けながらそう言葉を紡ぐ宰相を、クァルテは咲良に言われた通り、俯いたままひっそりと上目づかいで盗み見ていたのだが、そこでふと宰相の耳が赤いのに気が付いた。

眉間に皺を寄せ、顔は不機嫌そうなままで話し続けているので、興奮のあまり赤くなっているだけなのかもしれないとも思ったが、その頬もうっすらと赤くなっていて、これはもしかして、と、クァルテは咲良の意訳の言葉を胸の内で反芻した。

もし、咲良の意訳が正しいのならば、宰相は自分のことを……。

「……心配してくれてるの？　……ありがとう」

そう言って、微かに笑ったクァルテに、宰相はボンッと音でもしそうなほどに、一瞬で顔を真っ赤に染めた。頭から湯気が出ていてもおかしくないほどに、赤くなって狼狽えている。

「ばっ……馬鹿か！　自惚れてんじゃねーよ！　まったく、お前は……い、いつからそんな、都合のいい頭にっ……！」

おたおたとクァルテを見ながら、かつてない慌てようで早口に言葉を紡ぐ宰相に、クァルテは咲良が言っていたことが間違ってはい

なかったことを悟った。
いつもはつんとして冷たい表情の宰相が、顔を赤くして目線を彷徨わせている様子に、クァルテはついくすりと笑ってしまう。
そんなクァルテの笑みを見た宰相は、むっと口を引き結んで。
「何が可笑しいんだ！　……もう、お前など知らん！」
そう大声で言って、クァルテの横を通り過ぎ、つかつかと足音も荒く歩いて行こうとする。
しかし、数歩歩いたところで、ぴたりと足を止め、気まずそうな表情でクァルテを振り返った。
そして、胸元から何かを取り出すと、また荒い歩調でクァルテの前まで戻って来る。
「うちの主治医が調合した薬だ！　た、たまたま余ったから、お前にくれてやる！」
強い口調でそう言って、クァルテの手にその薬の入った袋を押し付けると、くるりと踵を返して、今度こそ振り返ることなく廊下の向こうの建物の中へと消えて行った。
一方のクァルテは、しばらくぽかんとした表情で、手元の薬の入った袋を見ていたが、やがてゆっくりと顔を上げて、咲良達の隠れている方に目をやった。
するとそこには、相変わらずトーテムポールのような状態のまま、ニッと満足げな笑顔で、ぐっと親指を立てている咲良と、苦笑いを浮かべているクロラムフェニルヴァイトがいた。

「よくあいつの考えてることが分かったわね。すごいわ、さくらちゃん！」

その後、三人で囲んだお茶の席で、クァルテが感嘆の籠った溜息を吐きながらそう言うと、咲良はふふふと嬉しそうに笑いながら。

「私のいた世界にも、あんなタイプの人がいるの。照れ隠しで、つい思いとは別のことを言ってしまったり、きつく当たってしまったりする、いわゆるツンデレってやつね。身近では初めて見たけど！

最初は、クァルテと話した後、宰相様がひどく落ち込んだ表情を浮かべていたのが気になったんだけど、陛下の話を聞いて確信したのよ」

「陛下の話？」

お茶の入ったカップを手に首を傾げたクァルテに、咲良は面白そうに笑いながら、その内容を口にした。

「たまに、こっそり陛下と宰相様が酒盛りをすることがあるらしいんだけど、酔っぱらった宰相様は、クァルテと話した日はいつも決まって、『なんで俺はあんな言い方しかできないんだ……！』って頭を抱えていたり、『あいつは昔は喧嘩が嫌いですぐに泣いてたのに、軍人なんて……』って呟いてたりするんですって」

咲良の言葉に、クァルテは驚きに目を瞠った。宰相が酒を飲むということも信じられなかったが、酔っぱらってそんなことを言っていたのかと、胸の奥がくすぐったくなる。

「ちなみに、クロラムさんみたいに、普段は女ったらしでスケベでだらしないんだけど、いざというときは頼りになる面倒見のいい兄

貴！　っ的なタイプは、ギャップ萌えってやつですかね」

「うっせえ」

宰相からもらった薬袋を眺めながら、そっと笑ったクァルテの横で、咲良がクロラムフェニルヴァイトの頬を突きながら、そんなやり取りをしていた。

そして、今では。

「ねえねえ、今夜一緒に飲みに行きましょうよ～」
「お前と違って、俺には仕事が山積みなんだよ」
「じゃあ、いつものお店で待ってるから」
「おい、俺は行くとは言ってないぞ！」
「そう言いながら、来なかったことないくせに～♪」

と、廊下ですれ違う際などに、仲良く話す二人が見られるようになったとか。

・クァルテと宰相（後書き）

ちなみに、二人のはただの友情です。念のため……；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1811u/

王妃の資格

2011年9月4日05時08分発行